

死の集合表象

— 身体と靈魂・生者と死者 —

阿久津 昌 三

1 はじめに

死の儀礼とシンボリズムに関する優れた作品に1907年の『社会学年報』に掲載されたロベール・エルツの「死の集合表象の研究への一考察」という論文がある。この論文の主題は「二次埋葬」の慣習であり、死体の操作を通して「死」の集合表象を明らかにしようとするものであった。この意味で、彼はデュルケムの弟子として比較社会学の発展に貢献することになった⁽¹⁾。この論文の意義については、ニーダム夫妻による英訳に寄せたエヴァンズ＝ブリチャードの序文のなかに読みとることができる。

「エルツの論文は全体と部分とを統合する記述の例証であり、諸事実のもつ意味はひとつひとつばらばらの諸事実それ自体のなかに示されるのではなく、それらの諸事実の相互関係のなかに示されている。つまり、人類学者は、これらの個々の諸事実の相互関係や、それゆえに、それらの全体の意味を明らかにするのである。インドネシアにおける死者の二重処理の意味を理解するためには、死霊について抱かれている信仰や服喪規範を知らなければならぬ。だが、ひとたび死の三局面—死体、靈魂、服喪者—の^{パターン}様子を把握すれば、ただちにこれらがどれも移行の観念を表わしていることが理解されるのである。さらに、なぜ支配者の死が公にされないのか、なぜ寡婦がすぐに相続したり再婚をしてはならないのか、なぜ老人や幼い子どもの死体が異なる扱いを受けるのかが理解できるのである。」⁽²⁾

エルツの論文は賞賛をもってしばしば引用されるのにもかかわらず、「右手の優越」の論文と比べると「死の集合表象」の論文は人類学の文献のなかで詳細に論じられることは少ない。ニーダムによるエルツの再評価も前者の論文についてであり、この論文は左と右の二項的な対立関係に関する論文集に収録されたが、後者の論文が掲載された英訳本は現在では絶



第1図 アサンテの葬儀

版となっている⁽³⁾。エルツの論文は「死」の習俗と観念を時間的な儀礼過程のなかでとらえようとするファン・ヘネップの通過儀礼論に受け継がれることになった。しかしながら、エルツの論文を評価する人類学者がいないというわけでもなく、ジャック・グディ (Jack Goody)、モーリス・ブロック (Maurice Bloch)、リチャード・ハンティントン (Richard Huntington)、ピーター・メトカーフ (Peter Metcalfe) などの人類学者たちはエルツの論文をもとに死の儀礼に関する社会学的、象徴的な分析を行っている⁽⁴⁾。本稿では、『ザ・バイオニア』紙に掲載されている死亡広告を分析することによって、身体と靈魂、生きる者と死せる者との関わりで、アサンテにおける死の集合表象を解読することが目的である。

2 死の儀礼

アサンテにおいて葬儀は埋葬の日に営まれるのではなく、埋葬後、数日や数週間、ときには5、6年以上も経過してから行われることがある。葬儀は死の発生後には次のような手続きを経て行われる⁽⁵⁾。

- a 死亡すると遺体は部屋に安置される。この場合に、親族たちは「泣く」ことを禁じられる。「泣く」という行為によって、死者が耳が遠くなると信じられている。死亡すると使者によって死の知らせが母系リニージの長 (*opanin*) と親族たちに、また、死者の父または後継者の父に知らされる。
- b この手続きを経て、死体を棺に納める前に、女性たちによって湯灌が行われる。湯灌は3回行われるが、母方親族が死体の右側、父方親族は死体の左側をふき清める。
- c ふき清められた死体は死者が生前に着ていた布を引き裂いて頭、首、手首、腰に巻かれ (この状態は埋葬されるまで続く)、また、死体の身体には金細工などで装飾される。
- d 死亡通知が広まると親族たちは死を悼んで遺体の周囲で慟哭することが許される。死亡通知が行き渡った後には「断食」と「葬儀」の儀礼が行われる。料理は死者の母方親族と父方親族とで共同で行われる。この際、母方親族はヒツジ、ニワトリなどの肉や食料を提供する (断食の期間は以前には7日間、現在では3日間程度である)。
- e 親族たちは頭の髪を剃りおとして、集められた髪の毛が家の入口におかれる。この量は死者の名声かどのくらいなのかを測る基準となる。遺族たちは赤い粘土を肩や額に塗りたくり、未亡人 (寡婦) はラフィアヤシを肘につけて故人との関係の深さを表現する。
- f 葬儀の費用はンサ (*nsa*) と呼ばれるが、会葬者の寄付で賄われる。その不足分は親族で調達し葬儀の約1週間後に収支決算が行われる。
- g 埋葬するための墓は母方親族と父方親族とで掘られる。

死の知らせが公にされる前には「泣く」という行為は禁止される。この行為は死者が耳が遠くなりあの世への道に迷うと考えられている。これに対して、死の知らせが公にされた後にはむしろ死を悼んで慟哭することが求められる。「泣く」という行為は「聲」のもつ境界的な性格に起因している。前者の場合には、「泣く」という行為に対する忌避は、表象と現実、この世とあの世という二つの世界の均衡のとれた関係を崩してしまうという「負」の記号として機能している。後者の場合には、「慟哭」という行為がむしろ積極的に要求され、



第2図 喪に服する女たち

あるいは必要とされ、二つの世界の均衡のとれた関係を維持するという「正」の記号として機能している⁽⁶⁾。川田順造は「死者の名を呼ぶ」という行為について次のように記述している。

「死者の名を呼ぶことは、死の側に入ってしまった者を、新生児の場合とは逆に、はっきり死の側に位置づけながら、ことばによって生者とかかわらせる行為だ。これには、死者と、名であることばと、生者との関係で、いくつかの相が認められる。

まず、死の直後の、まだ死者が遺体として現前としている状態で、死者を生前直接知っていた人たちが、死体を揺さぶったりしながら、故人の〈裸の名〉や綽名や親族名称で呼びかける相がある。モン社会に限らず、アフリカの多くの社会で、死の直後親族や近隣の女たちが号泣する習俗があり、これはある家で人が死んだという声の合図にもなる。それを聞きつけて近所の老婆やおかみさんが集まってくるが、死者の出た家の屋敷囲いに入るが早いのか、もう感染して大声に泣きはじめ、泣きながら死体の寝かしてある家長の年長妻の小屋まで来て、さらにはげしく泣き、死者の名を呼んで泣く。手放して、露天の屋敷囲いの中を歩きまわりながら、死者の名や、この上なくなまな悲歡のことばを涙声でまじえまじえ、大声をあげて泣く。高低さまさまな声が、あたりかまわずふりまかれ、泣いている女同志がぶつかったり、抱きあったり、すれちがって歩いたりしながら、ひたすら泣く。男たちは声は立てずに、ある者は涙ぐんで、この女たちの声に気を呑まれたように、神妙にうづくまったり、じっとうなだれたりして、死者の魂がからだを離れたあとの朝の、真昼の、あるときは夜中の、数時間をやりすごす。」⁽⁷⁾

泣き叫ぶという行為の根底には悲痛な感情を表現するものであると同時に、〈哀悼〉は死の儀礼の重要な要素となっている。また、ここには生者の頭髪を死者に捧げる「髪」の神秘性という死の儀礼の場面を解説することができる。この慣習は死者の名声を測る尺度となるが、今日では髪を剃りおとしなければ寄付を多くすれば許される⁽⁸⁾。さらに、かつてアサンテでは葬儀の費用をどのくらい負担するかは死者との親族・姻族関係によって厳密に決められている⁽⁹⁾。

3 「暦」と死の儀礼

ガーナの三大紙のひとつ『デイリー・グラフィック』(*Daily Graphic*)には毎日死亡広告が掲載されており、『ゴースト・デイリー』(*Ghost Daily*)と皮肉られているほどである。また、首都アクラについて「第2の都市」と呼ばれるクマンで発行されている新聞『ザ・パイオニア』(*The Pioneer*)という地方紙もまた死亡広告が紙面の約半分を埋めている(この新聞は、基本的には毎日発行されているが、死亡広告が集まらない時には休刊という状態で、また、死亡広告以外の記事は国際問題や国内政治などのダイジェスト版であり、まさに死亡広告のために発行されているといっても過言ではない)。アサンテでは、葬儀の盛大さは死者の名声に比例するということから、人々は葬儀に巨額な金を投じることもあって、派手な葬儀や広告を法律で禁止しようとする提案も教育委員会を中心に出ているほどである。

死亡広告には、死者の氏名、職業や役職、年齢、写真、死亡の日時、儀礼の日程(通夜、埋葬と葬儀、感謝の儀式などが記載されている。その下の欄には、喪に服する人々の氏名、寡婦(または寡夫)、両親、兄弟姉妹、子、孫、曾孫の氏名(職業や役職、居住地域)などが記載されている。死亡広告を新聞に掲載するためには公立中学校寄宿生の一学期分の学費に相当する費用がかかる。この費用は「金持ちは2万ドル、中流階級でも2千ドルは使っている」(1988年現在)という。このため教会や首長たちからの批判の声があがり、派手な葬儀や広告を法律で禁止しようとする生活改善運動の提案も出ているほどである⁽¹⁰⁾。

ここでは新聞に掲載されている死亡広告を分析する前に、アサンテにおける暦と儀礼との関わりについて述べなければならない。アサンテには6日の「週」(*nanson*)と7日の「週」(*nawotwe*)との組み合わせからなる42日を一か月と数えるアダドゥアナン(*adaduanan*)と呼ばれるアカン暦がある(*adaduanan*とは、語源的には *da* と *aduanan* との組み合わせからなる語で、*da* は「日」を、*aduanan* は「40」を指す。すなわち、*adaduanan* とは「40日」を意味する。実際には6日と7日を掛けあわせて42日となる)⁽¹¹⁾。

6日の「週」が *nwona*, *nyi*, *kuru*, *kwame*, *mono*, *fo* からなり、7日の「週」は、*wukuo* (水曜), *yawo* (木曜), *fie* (金曜), *mene* (土曜), *kwasio* (日曜), *dwo* (月曜) からなる。したがって、6日の「週」と7日の「週」とを組み合わせからなるアカン暦は次のように表わされる(第1表参照)。

第1表 アカン暦

1 <i>nwonawukuo</i>	2 <i>nkyiyawo</i>	3 <i>kurufie</i>	4 <i>kwamene</i>	5 <i>monokwasie</i>
6 <i>fodwo</i>	7 <i>nwonabena</i>	8 <i>nkyiwukuo</i>	9 <i>kuruyawo</i>	10 <i>kwafie</i>
11 <i>monomene</i>	12 <i>fokwasie</i>	13 <i>nwonadwo</i>	14 <i>nkyibena</i>	15 <i>kuruwukuo</i>
16 <i>kwayawo</i>	17 <i>monofie</i>	18 <i>fomene</i>	19 <i>nwonakwasie</i>	20 <i>nkyidwo</i>
21 <i>kurubena</i>	22 <i>kwawukuo</i>	23 <i>monoyawo</i>	24 <i>fofie</i>	25 <i>nwonamene</i>
26 <i>nkyikwasie</i>	27 <i>kurudwo</i>	28 <i>kwabena</i>	29 <i>monowukuo</i>	30 <i>foyawo</i>
31 <i>nwonafie</i>	32 <i>nkyimene</i>	33 <i>kurukwasie</i>	34 <i>kwadwo</i>	35 <i>monobena</i>
36 <i>fowukuo</i>	37 <i>nwonayawo</i>	38 <i>nkyifie</i>	39 <i>kurumene</i>	40 <i>kwakwasie</i>
41 <i>monodwo</i>	42 <i>fobena</i>			

第3表 死の儀礼プロセス

	time				space			
	date of death	wake-keeping ○	burial/funeral ● or ● ^B	thanksgiving ◎	place of death	place of ○	place of ● or ● ^B	place of ◎
(事例1)	29/12/92(TUE)	22/1/93(FRI)	23/1/93(SAT)	24/1/93(SUN)	Kumasi	Kumasi	Hometown ^B Kumasi ^F	Kumasi
(事例2)	8/1/93(FRI)	5/2/93(FRI)	6/2/93(SAT)		Kumasi	Kumasi	Kumasi	
(事例3)	10/12/92(THU)	5/2/93(FRI)	22/12/92(TUE) 6/2/93(SAT)	7/2/93(SUN)	Kumasi	Kumasi	Hometown ^B Kumasi ^F	Kumasi
(事例4)	29/12/92(TUE)	5/2/93(FRI)	6/2/93(SAT)	7/2/93(SUN)	Kumasi	Hometown	Hometown	Hometown
(事例5)	25/12/92(FRI)	22/1/93(FRI)	23/1/93(SAT)	24/1/93(SUN)	?	Hometown	Hometown	Hometown
(事例6)	7/11/92(SAT)	6/2/93(SAT)	7/2/93(SUN)		Hometown	Hometown	Hometown	Hometown
(事例7)	20/1/93(WED)	5/2/93(FRI)	?		Kumasi	Kumasi	Hometown ^B Kumasi ^F	
(事例8)	3/12/92(THU)	5/2/93(FRI)	6/2/93(SAT)	7/2/93(SUN)	Hometown	Hometown	Hometown	Hometown
(事例9)	8/1/93(FRI)	5/2/93(FRI)	6/2/93(SAT)	7/2/93(SUN)	Accra	Kumasi	Hometown ^B	Kumasi
	3/11/92(TUE)	5/2/93(FRI)	6/2/93(SAT)	7/2/93(SUN)	New York	Kumasi	Kumasi ^F	
(事例10)	2/1/93(SAT)	5/2/93(FRI)	6/2/93(SAT)		Hometown	Hometown		
(事例11)	31/12/92(THU)	16/2/93(TUE)	18/2/93(THU) 20/2/93(SAT)		Kumasi	Hometown	Hometown ^B Hometown ^F	
(事例12)	16/1/93(SAT)	16/2/93(TUE)	18/2/93(THU) 20/2/93(SAT)	21/2/93(SUN)	Kumasi	Hometown	Hometown ^B Kumasi ^F	Kumasi
(事例13)								
(事例14)								
(事例15)	12/2/93(FRI)		21/2/93(SUN)		Kumasi	?	Kumasi	
(事例16)	15/1/93(FRI)	19/2/93(FRI)	20/2/93(SAT)	21/2/93(SUN)	Kumasi	Kumasi	Hometown	Kumasi
(事例17)								
(事例18)								
(事例19)	14/2/93(SUN)		20/3/93(SAT)		Kumasi		Kumasi	
(事例20)	7/1/93(THU)		20/2/93(SAT)	21/2/93(SUN)	Kumasi		Hometown	
(事例21)	17/1/93(SUN)		20/2/93(SAT)		Hometown		Hometown	
(事例22)	?	26/2/93(FRI)	27/2/93(SAT)		Accra	Kumasi	Hometown	
(事例23)	?	26/2/93(FRI)	27/2/93(SAT)	28/2/93(SUN)	?	Hometown	Hometown	Hometown
(事例24)	?	3/3/93(WED)	4/3/93(THU) ~8/3/93(MON)	14/3/93(SUN)	Kumasi	Kumasi	Kumasi	Kumasi
(事例25)								
(事例26)	?	26/2/93(FRI)	27/2/93(SAT)	28/2/93(SUN)	Kumasi	Kumasi	Kumasi	Kumasi
(事例27)	7/2/93(SUN)	26/2/93(FRI)	27/2/93(SAT)		?	Hometown	Hometown	
(事例28)	23/12/92(WED)	26/2/93(FRI)	27/2/93(SAT)	28/2/93(SUN)	?	Hometown	Hometown	Hometown
(事例29)	18/1/93(MON)	26/2/93(FRI)	27/2/93(SAT)		?	Hometown	Hometown	
(事例30)	10/2/93(WED)	26/2/93(FRI)	27/2/93(SAT)	28/2/93(SUN)	?	Kumasi	Kumasi	Kumasi
(事例31)	15/2/93(MON)	24/2/93(WED)	25/2/93(THU) 27/2/93(SAT)		Kumasi	Kumasi ^B Kumasi ^F	Kumasi	
(事例32)	16/1/93(SAT)	26/2/93(FRI)	27/2/93(SAT)		Hometown	Hometown	Hometown	
(事例33)			25/2/93(THU)				Hometown	
(事例34)								
(事例35)	16/1/93(SAT)	26/2/93(FRI)	27/2/93(SAT)	28/2/93(SUN)	Kumasi	Kumasi	Kumasi	Kumasi
(事例36)								
(事例37)								
(事例38)	13/12/92(SUN)	6/3/93(SAT)	14/12/92(MON) 7/3/93(SUN)		Hometown	Kumasi	Hometown ^B Kumasi ^F	
(事例39)	21/2/93(SUN)							
(事例40)								
(事例41)	13/2/93(SAT)	26/2/93(FRI)	27/2/93(SAT)		Kumasi	Hometown	Hometown	
(事例42)	4/2/93(THU)	26/2/93(FRI)	27/2/93(SAT)	28/2/93(SUN)	Accra	Hometown	Hometown	Hometown
(事例43)	17/2/93(WED)	26/2/93(FRI)	27/2/93(SAT)	28/2/93(SUN)	Kumasi	Hometown	Hometown	Hometown
(事例44)								
(事例45)	15/2/93(MON)	26/2/93(FRI)	27/2/93(SAT)	28/2/93(SUN)	Mampong	Hometown	Hometown	Hometown
(事例46)								
(事例47)								
(事例48)	5/2/93(FRI)	26/2/93(FRI)	27/2/93(SAT)		Kumasi	Hometown	Hometown	

アサンテでは死の儀礼は伝統的には月曜日、木曜日、土曜日のいずれかに行うのが慣習であった⁽¹²⁾。そこで新聞に掲載されている死亡の日時、通夜、埋葬と葬儀、感謝の儀式などの死の儀礼プロセスを42日をサイクルとするアカン暦で図式化してみると次のようになる。(第3図参照)

アサンテではかつていわゆる葬儀と呼ばれる死の儀礼は月曜日、木曜日、土曜日に行われるのが一般的であった。しかしながら、これらの事例には月曜日の事例はみられない。木曜日の事例には〔事例11〕〔事例12〕〔事例24〕〔事例33〕があり、日曜日の事例には〔事例6〕〔事例15〕があり、それ以外の事例はすべて土曜日選ばれている(これらの36の事例をみると、葬儀の選日は木曜日は11.1%、土曜日は83.3%、日曜日は5.6%という結果が得られる)。言い換えれば、アサンテでは死の儀礼は金曜日の「通夜」に始まり土曜日の「埋葬」と「葬儀」を経て、日曜日の「感謝の儀式」をもって終わるというプロセスからなることを確認することができる。

また、同じ土曜日でも、第4日目(*kwamemene*)は0事例(0%)、第11日目(*monomene*)は3事例(10%)、第18日目(*fomene*)は15事例(50%)、第25日目(*nwonamene*)は4事例(13.3%)、第32日目(*nkyimene*)は0事例(0%)、第39日目(*kurumene*)は8事例(26.7%)である。同じ土曜日でもある特定の日が葬儀の日取りに選ばれるのは祖先崇拜を対象としたアダエ儀礼の周期と関わっていることから説明することができる。というのもアカン暦の第15日目にはアウクダエ(*awukudae*; *wukuo-adae*)、第33日目にはアクワシダエ(*akwasidae*; *kwasi-adae*)と呼ばれるアダエ儀礼が行われることから、同じ土曜日でもある特定の日が葬儀の日取りに選ばれるのはこれらの儀礼の終了をもって開催されるからである。

さらに、この資料から死者の儀礼は死後42日後にも行われることが確認できる(〔事例5〕〔事例14〕〔事例17〕〔事例18〕〔事例25〕〔事例29〕〔事例36〕〔事例40〕〔事例44〕)。また、死の儀礼は約一年後にはいわゆる「二次埋葬」という儀礼が行われることも確認することができる(〔事例34〕〔事例37〕〔事例46〕〔事例47〕)。この儀礼は事例が少ないために断定することはできないが、約一年後に行われる死の儀礼は第18日目(*fomene*)の土曜日に行われている。

アサンテではかつて死の儀礼は、死後、8日目、15日目、40日目、80日目、1年という節目に行われるのが慣習であったが、新聞に掲載された死亡広告で見ると限りでは、40日目(正確には42日目)と1年目に行われているのみである。つまり、8日目、15日目、40日目、80日目、1年という儀礼プロセスを経て葬儀が行われるというのは、王の葬儀以外は稀れであるといえる。ここでは、さらに、6日の「週」と7日の「週」との組み合わせとの関わりで死の儀礼プロセスを検討してみることが必要である。

アサンテでは7日の「週」を“female day”(*da bere*「女性の日」)と“male day”(*da nini*「男性の日」)に分類している。すなわち、“female day”が日曜日、火曜日、水曜日、金曜日であり、“male day”は月曜日、木曜日、土曜日と分類される⁽¹³⁾(この分類方法はアカン語群のなかでも異なった循環の体系をもっている)(第2表参照)。例えば、結婚式が

第2表 “female day”と“male day”

ASANTE	DAY	FANTE
Female	Sunday	Male
Male	Monday	Female
Female	Tuesday	Female
Female	Wednesday	Male
Male	Thursday	Female
Female	Friday	Male
Male	Saturday	Female

“female day”に行われるのに対して、埋葬や葬儀は“male day”に行われる。この分類方法に従って、死の儀礼は“female day”の金曜日の通夜に始まり、“male day”の土曜日の埋葬と葬儀を経て、“female day”の日曜日の感謝の儀式で終わるという構造をもっている。この意味で、7日の「週」を周期とする暦はアサンテにおける死の儀礼の基礎的な構造をなしている。

また、死の儀礼プロセスは通夜、埋葬と葬儀、感謝の儀式が行われる「時間」という座標軸で表わされると同時に「空間」という座標軸でも表わされる。儀礼空間の移動について見ると、通夜、埋葬と葬儀、感謝の儀式が行われる場合は、死者がホームタウンに住んでいた場合にはすべてホームタウンにおいて挙行され、死者が都市部に住んでいた場合には通夜、葬儀、感謝の儀式が都市部で、埋葬はホームタウンで行われている（第3表参照）。さらに、喪に服する人々がどのような階層からなっているかを見てみると、喪に服する人々が伝統的な階層に属するのか近代的な階層に属するのかは死者の位階によって分化している。より重要なのは喪に服する人々のなかに子や孫や曾孫が数多くいるかどうかという問題である。これについては川田順造がモシの事例をとりあげて次のように述べている。

「こうした仮葬式、および仮葬式後しばらくたって準備がととのってからの本葬式で、丁寧な名を呼ばれたたえられるのは、子や孫や曾孫、つまり後生をとむらってくれる者を大勢この世にのこした老人だけだ。若い死者に対しては、死の直後の女たちの号泣はあるが、葬儀らしいものは行わない」⁽¹⁴⁾。

アサンテでは生者の頭髪を死者に捧げるという慣習があり、この頭髪が多いか少ないかは子や孫や曾孫が数多くいるに関わってくることで、死者の名声を測る尺度となっているのである。この意味で、喪に服する人々のなかに子や孫や曾孫が数多くいることは死者の名声を測る尺度となる（第4表参照）。また、死には「良い死」と「悪い死」があり、かつてアサンテでは乳児や幼児期の死や動物に襲われたり毒蛇に噛まれて死んだとか倒れた木の下敷きになって死んだとか悪い死に方をした場合には葬式は行わずにごみ捨て場に葬りさられたという⁽¹⁵⁾。

4 「二次葬」の意味

ハンティントンとメトカーフは、エヴァンズ＝ブリチャードの死の三局面（死体、靈魂、

服喪者)の様式をもとに、死体と埋葬、靈魂と死者、生者と服喪者との三角形のなかでエルツの図式を解説している。これらは次のような3つの説明(説明①儀礼の規模/社会的秩序の表示⁽¹⁶⁾、説明②終末論/身体と靈魂の隱喩的な関係性/儀礼の諸形態⁽¹⁷⁾、説明③生者と死者の関係性/社会的性格の漸次的な消滅⁽¹⁸⁾)をエルツの民族誌の中から簡潔に抽出することができる。

説明①は死者の社会的地位とその地位に対応した儀礼の規模(大きな葬儀と小さな葬儀)についてとりあげている。説明②は死の儀礼のなかでも二次埋葬という特殊な形態を明らかにする公式を提示している。説明③は死者の社会的性格が漸次的に消滅する過程を明らかにするとともに、死者に対する記憶という形で靈魂を生者に関連させている。言い換えれば、説明①では死体とその処理を服喪者に関連させることで社会的な秩序がどのように明示されるのかを明らかにしている。説明②では身体と靈魂との隱喩的な関係(エルツのことばでは「身体の状態と靈魂の状態との一種の対称ないしは平行関係」という死の儀礼における象徴的な分析を行っている。説明③では生者と死者との関係を明らかにしている⁽¹⁹⁾。

エルツが死の集合表象をめぐる論文のなかで展開したものは、死の儀礼には、死体の第一次処理とそれに伴う儀礼としての一次葬(first funeral)と「死」の社会的な認知を行う儀礼としての二次葬(second funeral)という「葬儀の二重性」があることを明らかにしたことにある⁽²⁰⁾。エルツは死の儀礼過程を「身体としての死とその直後」、「中間の時期」、「最終の儀式」の3段階に分類している。社会的な意味での「死」はこの最終の段階の終了をもってはじめて完結するという図式をとっている。これらの時間的な段階は、死体、靈魂、服喪者という死の三局面との規則的な対応関係をなしている。しかしながら、ブロックとパーラーは、エルツのモデルは伝統社会に普遍的にみられるモデルではなく東南アジアにあてはまる特殊なモデルであるとして批判している⁽²¹⁾。これについては内堀基光が山下晋司との共同研究のなかで次のように述べている。

「エルツのモデルは、想像力の場合における死とその解決の試みという人間文化の内包する一般的論理を、死体の多段階的処理(複葬)を行う社会に適用した特殊モデルであり、こうした社会こそ、死とその解決の論理が時間の持続のなかで眼に見える現象として展開されるということの意味する。」⁽²²⁾

しかし、エルツのモデルはアサンテにおける死体の多段階的処理(複葬)の事例には適用することができるが⁽²³⁾、アサンテの場合には、死体の多段階的処理(複葬)に伴う儀礼的な意味と社会学的な意味(特に、義務履行終了、財産の再配分と寡婦の再婚禁止条項の解除)との関わりでとらえられなければならない⁽²⁴⁾。

アサンテでは死の禁忌期間は家族の場合には4日から7日位であり、その中でも老女は40日間に及ぶ。死者が夫であれば妻は8日間は不浄な期間とされ1年間は性交渉をすることが禁じられている。逆に、死者が妻であれば夫は15日間は性交渉をすることが禁じられている。寡婦は夫の葬式には重要な役割を果たしている。寡婦は埋葬される死者とともに喪に服さなければならなかった。この期間は8日間であり極めて危険な状態にあるとされている。というのも「死者が舞い戻り性交渉をすると寡婦は不妊になる」と信じられていたからである。

したがって、寡婦は死者に食物と金、特別な衣裳を用意することが期待されていた⁽²⁵⁾。これらの行為は今日まで続いている。しかしながら、かつては寡婦は亡夫の権利を継承する男性に相続されてその新しい妻となる「寡婦相続」（あるいは「寡婦庇護」と呼ばれる制度があったが、現在では、多くの寡婦たちは独身で生活するという事例が目立っている。これは夫への依存力の強弱に関係しているが、農村部よりも都市部において顕著である⁽²⁶⁾。寡婦が「死体の多段階的処理」という死の儀礼プロセスに関わっているのは、まさに義務履行終了、財産の再配分、再婚禁止条項の解除という社会学的な意味によるものである。言い換えれば、死体の多段階的処理という儀礼プロセスは<死>の<生>への象徴的に置換する（あるいは隠喩的に置換する）文化的な装置であるといえるであろう。

（付記）本稿は、日本民族学会第28回研究大会（於・東北大学）において発表した「死の儀礼—ガーナの新聞にみる死亡広告—」にもとづくものである。なお、本稿は、平成4年度文部省科学研究費補助金（国際学術研究）「アフリカ諸社会における女性の比較研究」（研究代表者和田正平国立民族学博物館教授）（課題番号04041116）、平成6年度文部省科学研究費補助金（一般研究C）「アフリカにおける王権、図像、歴史表象—特に、西アフリカ、ガーナ共和国のアシャンティの事例を中心として—」（課題番号06610282）の研究成果の一部である。

注

- (1) Robert Hertz, "Contribution à une étude sur la représentation collective de la mort," *L'Année sociologique* 10(1907): 48-137 (吉田禎吾・内藤莞爾他訳『右手の優越』, 東京: 垣内出版, 1980年所収)。
- (2) E. E. Evans-Pritchard, "Introduction," (in) Robert Hertz, *Death and the Right Hand* (trans. R. and C. Needham), London: Cohen & West, 1960, p. 15 (吉田・内藤他訳, 前掲書, 所収)。
- (3) Rodney Needham (ed.), *Right and Left: Essays on Dual Classification*, Chicago: University of Chicago Press, 1973.
- (4) Jack Goody, *Death, Property and the Ancestors*, Stanford: Stanford University Press, 1962; Maurice Bloch, *Placing the Dead: Tombs, Ancestral Villages, and Kinship Organization in Madagascar*, London: Seminar Press, 1971; Maurice Bloch, "Tombs and States," (in) S. C. Humphreys and H. King (eds.), *Mortality and Immortality: The Anthropology and Archaeology of Death*, London: Academic Press, 1981; Maurice Bloch and Jonathan Parry (eds.), *Death and the Regeneration of Life*, Cambridge: Cambridge University Press, 1982; Richard Huntington and Peter Metcalf, *Celebrations of Death: The Anthropology of Mortuary Ritual*, Cambridge: Cambridge University Press, 1979 (池上良正・川村邦光訳『死の儀礼—葬送習俗の人類学的研究—』, 東京: 未来社, 1985年)。
- (5) K. N. Bame, *Profiles in African Traditional Popular Culture/Consensus and Conflicts: Dance, Drama, Festival and Funerals*, New York: Clear Type Press Inc., 1991, pp. 119-127; D. M. Warren, *The Akan of Ghana*, Accra: Assemblies of God Centre Ltd, 1986, pp. 19-22; K. A. Busia, *The Position of the Chief in the Modern Political System of Ashanti*, London: Oxford

- University Press, 1951, pp. 23-24.
- (6) 渡辺照宏は「アフリカ西海岸の黒人も死者をよんで、自分たちを見すてないでくれと嘆願するが、生存中つんばだったものには声をかけない」と記述している(渡辺照宏,『死後の世界』,東京:岩波書店,1959年,p.38)。
- (7) 川田順造,『聲』,東京:筑摩書房,1988年,pp.123-124。
- (8) 世界の諸民族で髪が重要な意味をもっている。髪的神秘性については,エドモンド・リーチの『呪術的な髪』(1958年)の論文以後数多くの論文や著書がある(Edmund Leach,“Magical Hair,”*Journal of the Royal Anthropological Institute*88(2)(1957):147-164)。また,吉田禎吾,『宗教人類学』,東京:東京大学出版会,1984年,pp.165-175を参照されたい。
- (9) R. S. Rattray, *Religion and Art in Ashanti*, Oxford: The Clarendon Press, 1927, pp. 156-157.
- (10) 松濤弘道,『世界の葬式』,東京:新潮社,1991年,pp.269-271。
- (11) アカン暦については, P. F. W. Bartle, “Forty Days: The Akan Calendar,” *Africa* 48(1) (1978): 80-84; J. K. Adjaye, “Time, Calendar, and History among the Akan of Ghana,” *Journal of Ethnic Studies* 15(3)(Fall 1987): 71-100) を参照されたい。
- (12) Peter Saprang, *Ghana in Retrospect: Some Aspects of Ghanaian Culture*, Accra-Tema: Ghana Publishing Corporation, 1974, p. 30.
- (13) Adjaye, *ibid.*, pp. 91-92.
- (14) 川田, 前掲書, p. 125; Meyer Fortes, *Kinship and the Social Order*, London: Routledge Kegan Paul, 1969, pp. 187n-188n, 203-204; Busia, *ibid.*, p. 7.
- (15) M. D. McLeod, *The Asante*, London: British Museum Publications, 1981, pp. 37-38.
- (16) Hertz, *ibid.*, pp. 32, 76.
- (17) Hertz, *ibid.*, p. 46.
- (18) Hertz, *ibid.*, pp. 37-38.
- (19) Huntington and Metcalf, *ibid.*, p. 65.
- (20) 葬儀の二重構造に関しては, エヴァンズ=プリチャードはburial ceremony と mortuary ceremony, マイヤー・フォーテスは mortuary ceremony と funeral ceremony とに分類している (E. E. Evans-Pritchard, “Burial and Mortuary Rites of the Nuer,” *African Affairs* 49(1949): 56-63; E. E. Evans-Pritchard, *Nuer Religion*, Oxford: The Clarendon Press, 1956, pp. 144-176 [向井元子訳『ヌア族の宗教』,東京:岩波書店,1982]; Meyer Fortes, *Religion, Morality and the Person: Essays on Tallensi Religion*, Cambridge: Cambridge University Press, 1987)。
- (21) Bloch and Parry, *ibid.*
- (22) 内堀基光・山下晋司,『死の儀礼』,東京:弘文堂,1986年,p.26。
- (23) アサンテにおける王の葬儀の事例については, Shozo Akutsu, “The Demise and Enthronement of the Asantehene: Political Aspects of Asante Kingship,” *Senri Ethnological Studies* 31(1992): 517-519を参照されたい。
- (24) また, 大森元吉は二次葬の儀礼的意味と社会学的意味を次のように分類している。
 儀礼的意味(A)とはa₁)死者の霊化と祖霊群への参加, a₂)近親者の忌服終了, a₃)死霊, 死の禁忌への恐怖解消, a₄)死者への義務履行第一段階〔二次葬の執行〕終了であり, 社会学的意味(B)とはb₁)社会的人格の消滅〔社会的地位役割の引継完了〕, b₂)社会的地位役割の全体的統合関係再編成, b₃)財産の再配分, b₄)単縁集団の分裂と再統合〔親族組織の維持〕, b₅)社会的序列関係, 集団相互の紐帯強化, b₆)社会活動上の制約解除である(大森元吉「二次葬(Second Funeral)の社会学的意味」『アフリカ研究』5(1967):10-11)。

- (25) Rattray, *ibid.*, pp. 171, 499.
- (26) D. D. Vellenga, "The Widow among the Matrilineal Akan of Southern Ghana," (in) Betty Potash (ed), *Widows in African Societies*, Stanford: Stanford University Press, 1986, pp. 220-240.

(1994年8月31日 受理)